

平成 18 年度 公開学術講座（調査・研究成果の公開）（ 美 05-06-1/5 ）

第 40 回美術部オープンレクチャー「人とモノの力学」

美術部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座「美術部オープンレクチャー」を毎年秋に開催しており、本年度で 40 回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2 日連続で開講し、聴講者の便宜を図るよう努めた。今回は「人とモノの力学」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は、2 日間でのべ 239 人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、211 人から回答を得た（回収率 88 %）。結果は、「たいへん満足した」81 人、「おおむね満足した」103 人、「不満が残った」12 人、無回答 15 人を数え、回答者の 87% が満足感を得たことがわかった。

第 1 日：2006（平成 18）年 10 月 27 日（金）午後 1:30～4:30、東京文化財研究所セミナー室

・「10 世紀の造寺造仏」皿井舞（企画情報部）

京都市の南東に位置する笠取山に造営された醍醐寺は、平安時代・貞観年間（859～877）の終わり頃に、聖宝が開創した真言密教の寺である。本講演では、この上醍醐薬師堂に安置されていた、10 世紀初頭の作である薬師如来像について、しばしば指摘されてきた復古的な造形要素とそれが要請された背景を読み解いた。

・「奈良・興福寺の造像と図像継承」瀬谷貴之（神奈川県立金沢文庫）

興福寺は創建以来、災厄にあいながらも、その都度再興されてきた。本講演では同寺の鎌倉再興造像の図像継承を中心に論じた。まず、旧講堂諸尊像の図像の規範性を明らかにし、次いで旧西金堂安置の天燈鬼・竜燈鬼像における古典図像の改変・創意を指摘した。そして、これら興福寺内における図像継承の両者・両様のあり方を位置付けた。

第 2 日：2006（平成 18）年 10 月 28 日（土）午後 1:30～4:30、東京文化財研究所セミナー室

・「雪舟と宗湛」綿田稔（美術部）

雪舟等楊はその制作の大部分を山口で行ったが、ちょうどそのころ京都で活躍した絵師に自牧宗湛という人がいる。現在、宗湛は忘れられており、一方で雪舟は国家の高評価を得ている。本講演では、両者の評価がいつどこで入れかわるのかに注目し、両者の歴史的価値がどの辺りにあるのかを浮き彫りにすることを試みた。

・「本朝画史の情報と成立」五十嵐公一（兵庫県立歴史博物館）

狩野永納の『本朝画史』は日本美術史研究の最重要文献の一つだが、永納はそこに記した情報を一体どのように入手したのだろうか。また、『本朝画史』完成に至るまでにはどのような経緯があったのだろうか。本講演では、この 2 つの問題を永納の交流関係に注目しながら考えるとともに、『本朝画史』を新たな視点から捉えてみた。